

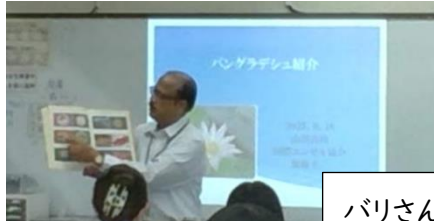
家庭発展 特別授業「バングラデシュってどんなところ？」

9月16日(火)、認定特定非営利活動法人「国際エンゼル協会」の加藤圭二さん、桧垣保子さんにお越しいただき、3限はバングラデシュの生活文化の紹介と児童養護施設の運営や子ども達への奨学金、学校建設、農村女性への識字教室などの現地への支援、その活動を支えるためのチャリティーバザーや子ども食堂など日本国内での活動について加藤さんに講演していただき、4限は民族衣装(サリー)の着付け実習として、桧垣さんによる代表生徒へのサリーの着付け師範の後、好きな色のサリーを選び、ペアになって自分達で色とりどりのシルクのサリーを着付け、記念写真撮影を行いました。

今回は、現在来日されているバングラデシュ現地代表のアジズル・バリさんとYURIKO エンゼルススクール校長のアリフザマンさんも協会の代表理事の東村眞理子さん、事務局長の東村良平さんとともに来校されました。2限の授業見学では、音楽の授業での chromebook を利用した作曲の様子や書道の作品、情報でのエクセル活用などに非常に興味を示されていました。

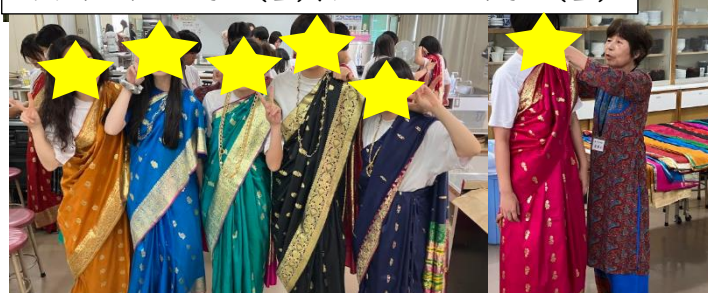
3限冒頭にはバリさんにバングラデシュの教育制度(5年-5年-2年:小-中-大学 ※小中が義務教育)や日常生活についてお話いただきました。ルティー(ナンに近い食べ物)や日本のカレーと違ってスパイスを多用し、手で食べるという話には、先週の授業(調理実習)でルティーとバングラカレーを作ったところだったので、生徒たちも反応していました。また、日本では結構高いマンゴーが1キロ100円ぐらいと聞き、驚きの声を上げていました。

授業後のレポートでは、「バングラデシュの子どもたちは学校に通って夢を見つけるけど、貧困で学校に通えない子もいる。日本は当たり前のように行けていることに感謝しないといけない。」「バザーへの協力や募金など協力できることはできる限りしたい。」「右手で食べるということは覚えておいてバングラデシュを訪れる機会があれば活かしたい。」などと述べており、他国の現状から自国や自分の行動について考え、他国の文化を尊重する姿勢も養われ、学びを深められた生徒が多かったです。



バリさんにいただいた絵本を回覧

↑アリフザマンさん(左)、アジズル・バリさん(左)



様々な色のサリーから選び、ペアになって着付けました



6mもあるサリー

桧垣さん(左)が着用されているのは日常着のサロアカミス